

中村和郎先生, 寺阪昭信先生とグレコ会

若林芳樹

最初に、今回の追悼文集を提案した立場から、企画の趣旨と経緯について述べておきたい。グレコ会と理論地理学ノートの発足時に尽力された中村先生と寺阪先生が相次いで亡くなられたことから、何か記録を残しておきたいと考えて、2023年3月の日本地理学会春季大会の翌日に都立大の国際交流会館でグレコ会を開催した。コロナ禍の間は開店休業状態だったグレコ会も2024年には50年目を迎えることから、その来し方行く末を考えるよい機会だと考えて、草創期のことをよくご存じの堀信行先生、小林茂先生、それに寺阪先生とのお付き合いの長い志村喬先生に声を掛け、中村・寺阪両先生とグレコ会の接点について語っていただいた。このときの談話は録音して文字起こしをし、今回の記事に掲載している。また、この会に参加されていた方たちを含む関係者に寄稿を呼びかけたところ、稲田道彦先生、安藤清先生、中田裕一先生が応じてくださった。

他の寄稿者に比べて、私自身はグレコ会との接点も二人の先生との直接のつき合いも長くはなく、都立大理学部地理学科に助手として着任した1986年より前に中村先生は駒澤大に転出されており、寺阪先生もその1年後には流通経済大に転出された。しかし、広島大の学生時代から両先生は、遠くで仰ぎ見る存在だった。都立大に着任後は、中村先生とグレコ会や学会でお会いする機会があり、寺阪先生とは科研費の研究分担者に加えていたいて貴重な経験を積ませていただいた。このように他の執筆者とは異なる私の立場から寄稿することで、両先生とグレコ会の活動を多面的に評価するのに多少は貢献できるかもしれない。

私がグレコ会の存在を初めて知ったのは、広島大の学部3年次に野間三郎先生が編集された『空間の理論』(野間編, 1976)を読んだのがきっかけだった。その頃は地理学教室の先輩・後輩たちと一緒に日本語訳が出版されたばかりの『地理学基礎論』(ハーヴェイ, 1979)を輪読していたので、計量革命の古典的論文が翻訳された『空間の理論』を取り寄せて、英語圏での地理学について理解を深めることができた。同書には、両先生も訳者として名前が挙がっていたが、グレコ会が発行した「理論地理学ノート」にも、

興味をそそられる記事が満載されていた。とくに創刊号の巻頭論文である中村先生の「空間の秩序とその認識」(中村, 1978)は、後半部分が空間認知に焦点があてられていて、読み返すたびに新しいアイデアをいただいた記憶がある。また、お二人に梶川勇作先生を加えた3人が共著で書かれた「新しい地理学への道」(中村ほか, 1976)は、当時のグレコ会の活動の成果をコンパクトにまとめられた内容で、私が専門とする行動地理学の「新しい地理学」の中での位置づけが示されていた。

このように、当時の日本では都立大が「新しい地理学」を先導する役割を担っていたことは間違いない。地方大学の学生だった私にとって、グレコ会も都立大も遠くで憧れる存在となっていた。そこにじかに接した最初の機会は、1983年に千葉大で開催された日本地理学会春季学術大会後に房総で開かれたグレコ会の会合であった。その頃、広島大から都立大の大学院に進学された先輩の近藤一憲氏が在籍されており、その紹介でこの会合に参加させていただいた。旅館の広い座敷が会場で、緊張していたせいか、末席で研究発表と議論を傍らで黙って聞いていたことしか記憶にない。

広島に戻ってから、その話を総合科学部の堀信行先生に話をしたところ、広島版のグレコ会を開こうという話になった。文学部と総合科学部の院生が集まって、潜水艦のような堀先生の研究室に肩を寄せ合って定期的に新着雑誌の輪読会を開くようになった。それ以前から聴講していた堀先生の授業からは、グレコ会や都立大の地理学教室の雰囲気伝わってきたが、雑誌会で新着の洋雑誌の記事について議論することで、それが実感できたのを覚えている。しかし、その数年後にまさか私が都立大に着任することになるとは想像もしていなかった。

1986年4月に都立大の助手として着任することになって、最初に寺阪先生から与えられた仕事は、英語圏での行動地理学論争をまとめた論文集“Behavioral Problems in Geography Revisited”の翻訳の手伝いで、私の役割は都立大のスタッフと院生が作成した訳文をチェックすることであった。同書は私も院生の時に読んではいしたが、精読はしていなか

ったので、引用文献にもあたって内容をより深く理解することができた気がする。じつはそれ以前にも寺阪先生とは広島大に集中講義に来られたときにお会いしたことがあった。大学院生だった私は、行動地理学の研究を始めていたので、先生の授業でとりあげられた時間地理学や行動地理学の新しい話題には、大いに刺激を受けた。

寺阪先生が行動地理学への関心をもたれていたことは、先生が編集された「理論地理学ノート」の3号～5号の内容にも表れている。3号は災害パーセプションの特集で、現代の災害地理学の先駆的な業績といえる。それに続く4号も災害が特集されているが、その1つの話題が1984年の世田谷電話線途絶事故であった。これは情報化社会のインフラとしての通信網の重要性を示唆しており、先生がその後手がけられた情報化研究につながったのかもしれない。そして行動地理学特集ともいえる5号には私も寄稿させていただいた。こうした新しいテーマに対する嗅覚は、先生から多くのことを学んだ気がする。

寺阪先生は1987年に流通経済大に転出されたため、同じ職場での付き合いは1年限りと短かった。しかし、その後も科研費の仕事で接する機会があった。その最初は、「高度情報化社会における地域構造の変容」(総合研究A)の分担者に加えてもらったことである。代表であった寺阪先生のもとで研究プロジェクトの手伝いをしたり、成果のとりまとめの合宿に参加したりしたことで、共同研究のノウハウを学ぶことができた。その成果をまとめたのが、北村ほか編(1989)であり、共著で英語の展望論文の執筆にも加えていただいた。

その後はトルコの海外学術調査でメンバーに加えてもらい、1992年から1996年にかけて主にアンカラとアンタリヤに約1ヶ月ずつ3回にわたって初めて海外調査に同行した。現地では体調を崩して私が足を引っ張ったこともあったが、なんとか調査についていくことができ、貴重な経験となった。その成果は寺阪編(1994)として出版され、私も寄稿させていただいた。それに同行してわかったのは、寺阪先生のフットワークの軽さで、調査が休みの日には一人で遠出されることもあった。同じ調査隊には山本健児先生や水内俊雄先生といった熟練したフィールドワーカーがおられて、私はとてもかなわないことを実感し、その後の海外調査の継続は断念した。

それから学会などで折に触れて寺阪先生とお会いすることがあったが、いつも都立大の地理学教室のことを気に掛けていらっしやるようすだった。

一方、中村先生とは同じ職場で一緒に過ごしたことはないにもかかわらず、グレコ会や学会でお目にかかって励ましの言葉をいただく機会もあった。1つ記憶に残るエピソードを挙げると、日本地理学会秋季学術大会で中村豊氏の車に同乗した際の会話がある。中村豊氏が地理的センスのあるニュースキャスターは誰かと問うと、中村先生はテレビ朝日の久米宏を挙げられた。彼を選んだ理由として先生がおっしゃるには、地図を使ってニュースの現場と背景を伝える工夫がみられるからだという。そこには地理的思考と地図との関わりが示唆されており、また中村先生の地図への関心の高さが表れている。

その後、中村先生は2005年に日本国際地図学会(現・日本地図学会)の会長に就任されるが、私は常任委員の一人として学会活動で先生を支える立場になった。先生の還暦記念の一環として刊行された中村編(1997)でも、近代地理学における主題図の役割について執筆されているが、それは従来の地図学で見落とされていた重要な問題提起のように思えてならない。駒澤大に移られてからは、新たに「地理学サロン」を主宰され、そのメンバーが中心になって刊行された中村編(2005)からは、地理的発想の源泉としての地図の役割の大きさを実感させられる。

このように、両先生の仕事からグレコ会が発足した当時の都立大地理学教室の雰囲気伝わってくるが、二人に共通するのは、絶えず新しい動きに目を向けながら地理学の本質を探究する態度だと思う。今年で50年目を迎えるグレコ会がそれをどう継承するかは、今後の担い手に託されている。

(東京都立大学)

文 献

- 北村嘉行, 寺阪昭信, 富田和暁編 (1989): 『情報化社会の地域構造』 大明堂, 312p.
- コックス, K., グレッジ, R.G. 編, 寺阪昭信監訳 (1986): 『空間と行動論—地理学における行動論の諸問題』 地人書房, 332p.
- 寺阪昭信編 (1994): 『イスラム都市の変容—アンカラの都市発達と地域構造—』 古今書院, 277p.
- 中村和郎 (1978): 空間の秩序とその認識. 理論地理学ノート'78, 1, 1-17.
- 中村和郎編 (1997): 『地理学「知」の冒険』 古今書院, 206p.
- 中村和郎・梶川勇作・寺阪昭信 (1976): 新しい地理学への道. 人文地理, 28, 508-531.
- 野間三郎編 (1976): 『空間の理論—地理科学のフロンティア』 古今書院, 268p.
- ハーヴェイ, D. 著, 松本正美訳 (1979): 『地理学基礎論: 地理学における説明』 古今書院, 352p.